
乙女ゲーマーな彼女

詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女ゲーマーな彼女

【Nコード】

N9944Z

【作者名】

詩音

【あらすじ】

『才色兼備』その言葉がピッタリな生徒会長である彼女。それに対して、俺は一般生徒。俺たちに関係性なんて、今も、これからもないもの。そう考えていた。だけど、ある日偶然向かったゲームシヨップで生徒会長を見かけてしまい、彼女の秘密を知ってしまう。そして、俺と会長の妙な関係がスタートするのだった。

0 回目 プロローグ

才色兼備なんて言葉がぴったり合うような人間、この世界に本当にいるのかと考えたことがある。どんなに素敵な人でも、多少なりとも難はあるものだ。

それは、テレビを見ていてもわかることだろう？

どんなに綺麗な人でも、性格がいいとは限らない。

どんなに頭のいい人でも、容姿が端麗とは限らない。

だけど、そんな考えの俺でもこいつは本当に完璧なんだろうなと思ってしまう女がいた。

彼女は田舎の学校の生徒会長で、俺とはクラスも違う。

だけど、彼女の話が俺のクラスまで届かない日はなかった。まあ、二クラスしかないから普通かも知れないけど。

それでも、彼女は完璧だった。噂ですら、彼女の魅力を伝える手段としかなくていいない。彼女の批判をするような人間なんて、ゼロに等しかった。

例えば、生徒からの要望。

彼女はそれが可能なことであれば、一人で校内を駆け回り、その実現を求めた。そして、実際に実現させた。

それが不可能なことであれば、要望を出してきた人にテキトウな返事をするのではなく、その人がどうしてそれが不可能なのか理解できて、後々色々なことを思ってしまったような完璧な返答を返した。

異常な行動力、そして、そんな彼女の行動を支えてくれる人材を集め、それを率いるリーダーシップを彼女は持っていた。

そんな人間が、どうしてこんなに田舎の学校に納まっているのか、
とか思ったこともある。

だけど、そんなこと考えたって俺が知ることは出来ないもので。
俺に出来るのは、遠めに彼女の活躍を見ていることくらいだった。

成績も全国トップクラス（うちの学校で勉強してないところも更
々と解いてしまう）、美女というわけではなく、可愛い寄りだが、
それもこれから綺麗になるのだろうと期待を持てるような可愛さ（
彼女と一緒に市内に出かけたと話をしていたクラスメイト曰く、男
性から声をよくかけられるそうだ）、身長は157cmと小柄だが、
それを感じさせない何かを持っていた。

だから、これは本当に偶然なんだ。

俺は、何も悪くない。

たとえ、ゲームショップで会った彼女が左手にゲームを持って、
右手の人差し指を俺に向けて、泣きそうな顔をしていたとしても、
俺は悪くないのだ。

「あ、ああ、あんた……学校の……」
「……どうも」

泣きそうな彼女……生徒会長は、フルフルと身体を震えさせ、左
手からゲームを落とした。カシャンと軽い音がその場に響く。

ああ、俺、どうしたらいいんだろうか……

これが、俺、時^{とき}一時と、彼女、生徒会長である少女岡本^{おかもと}花火^{はなび}の始
まりだった。

1回目 ゲームショップにて

何が原因で、俺はこんな目にあっているのだろうか。

日曜、暇を持て余していた俺に、母さんが市内に買い物に行くと
いうので来ないかと誘ってきた。

そして、俺はその誘いに乗り、四十分ほどかけて車で田舎の町か
ら市内にまで遊びに来たのだ。

母さんの目的はDVDを借りに来たことだったが、俺は特にDV
Dに興味がなかったので、一人レンタルショップの正面にあるゲー
ムショップに来ていた。

ゲームショップの中は人も多くなく、店内を俺はテキトウに歩き
回っていた。

そんな時だった。彼女を、見つけたのは。

最初は、誰かわからなかった。

ふらふらと歩いていて、角を曲がった場所で、じっとゲームを見
ている少女。

160cmもなさそうな小柄な可愛らしい少女だった。

俺は、最初は、可愛い……と、ぼんやり考えただけだった。だけ
ど、その少女をどこかで見たことがあることにふと気がつく。

そこで、どこで見たかなあ……と考えた。

その結果、俺は一人の名前を頭に浮かべるのだ。

岡本花火^{おかもととはなび}という、才色兼備なうちの学校の生徒会長を。

最初は、そんなわけがあるはずないと考えた。だって、普通に考えてわかる話だ。学校で習ってもないような勉強をスラスラと解いてしまう様な、生徒会の仕事を持ち帰って一人ですべてこなしてくるような人間に、家でゲームなんかする時間があるわけがないことくらい。

だから、こんなところに彼女がいるわけない。これは、他人の空似だ。

そう、思うことにしたのだ。

なのに、そんな俺の善意を彼女はわかってくれなかった。

品定めを終え、一本のゲームを手にした彼女は俺の方向を向く。多分、レジに行こうとしたんだろう。ニコニコと笑う彼女は、かなり可愛くて、魅力的だった。

そう、俺が、もう少し早くここを離れておけばよかったんだ。だけど、それが遅れてしまい、彼女と顔を合わせることとなる。

ここで、冒頭に戻る。

「あ、ああ、あんた……学校の……」

他人のフリをしてくれてもよかったのに、俺に人差し指を向けて、彼女はそんな言葉を発してしまうのだ。

流石に、ここで無視をするわけにもいなくて、「……どうも」と俺は返事をする。

そして、彼女は笑顔から一転、泣きそうな顔をして、左手からゲームを落とす。カシャンと軽い音が響いた。

それから、なかなか動かない彼女。俺はどうしようかと考えたが、とりあえず落ちているゲームを拾おうとしゃがんで手を伸ばした。

「だ、駄目!!」
「え?」

そう、彼女が叫んだが遅かった。俺は、ゲームを手にしてしまった。

そして、タイトルを見てしまった……『恋の処方箋』と書かれている。

ついでに、主人公らしき少女が滅茶苦茶キラキラした美少年三人に囲まれたパッケージも。

……これが何のゲームなのか、なんとなく察することが出来た。
これは、あれだ。

乙女ゲームってやつだ。
所謂、ギャルゲーの反対の物だ。

ギャルゲーは基本的に男性に販売することを目的とした、男の主人公が可愛い女の子と恋愛するゲーム。
乙女ゲームはその逆、つまり女の主人公がかっこいい男の子と恋愛するゲームだ。

………なんで、そんなものを生徒会長が……

いや、そりゃ、プレイするために持つてるんだろう。
買おうとしてたんだから、当然だ。

でも、会長がこんなゲームを?
正直、考えられなかった。
なら、間違えて買ったってことは?

……いや、物凄くじつくり品定めしてたんだっ

そんなことを考えながら、じつとゲームのパッケージを見ていたら、パシッと軽く頭を殴られた。

痛くはないけど、びっくりした。

叩いたのは、勿論生徒会長。

会長は泣きそうな顔で、可愛い、黒目がちな瞳で俺を睨んでいる。そういえば、いつもは低い位置でツインテールなのに、今日は高い位置でポニーテールなんだな。

「そ、そんなに見んなっ！」

また、妙なことを考えていたら手からゲームを取られた。会長は、ゲームをぎゅっと胸元に抱き寄せる。

「……な、何のゲームかわかった？」

会長は恐る恐るといった様子で俺にそんなことを尋ねてくる。ここで、ノーと言っても多分会長は信じないとなんとなく俺はわかっていた。

仕方ないので、素直に頷く。

「っ……っ、これは、あれよ！ あ、あくまで私の暇を潰すための道具で……いい、息抜きみたいなものよ！」

その言葉は、どう聞いても趣味でやっているとしたか聞こえなかった。

だって、忙しい会長がわざわざ暇を見つけてゲームをしているというのだ。

会長なら、読書でもしているかと正直思っていた。

「いや、いいよ。好きなんだろ？」

「つつっ!!! す、好きとか、そういうのじゃない!」

必死で否定しているが、大事そうに抱きかかえられたゲームを見ていると、会長の言葉が真実とはとても思えなかった。

「いや、いいです。俺、人には言いませんから。それじゃあ、さようなら会長」

そう、会長の言い訳なんて聞く必要はないんだ。

知っているけど、知らない。もともと、俺と会長に深いかかわりはないんだから、ここで話はお仕舞いにすればいい。それで、正解だ。

そう思って、俺は会長に背を向けたのだけれども……

2回目 よくわからない展開

ガシッと、会長は俺の腕をつかんだ。
いやいやいや、何でつかむ!?

表情には出してないはずだが、俺は内心結構焦っている。だって、当たり前だろ?

学校では一切はなしをしない、高値の花のような生徒会長様に、休日に偶然あつて、多分、見てはいけないうことを見てしまつて、所謂、秘密を知りかけていて、それを俺はなかったことにしようと提案しているのに、会長はそれでは駄目なようで……後ろを向いて、話してもらおうとすれば、綺麗な瞳に涙を浮かべて、俺を睨んでいた。

顔、近いし……可愛いし……

ここまで近くで見たのは、流石に初めてのことだ。なんというか、会長つて本当に整った顔をしていると再認識してしまった。

多忙と有名なのに、肌の手入れも怠っていないようで、ニキビなんか一つもない。化粧も、しているようには見えないが、目はとても大きくて、唇はピンク色……って、俺は何を考えてるんだ!

邪念を振り払い、「か、会長?」と一度呼んでみる。すると、会長はなんともいえない、困ったような表情を見せた後、

「……み、られたなら仕方ない……」
「は?」

「み、見られちゃったから、もう仕方ないって言ってるのよ!」

あ、あんた……じゃなくて、時！」

「え……名前、知ってんの？」

時、と呼ばれて、少し、驚いてしまった。まさか、会長が話もしたことがない俺の名前を知っているとは思わなかったから。

「あ、当たり前でしょ。学校、全校で何人だと思ってんのよ」

まあ、それもそうか。

俺の通う学校、つまり、会長が生徒会長を勤めている学校は田舎の本当に何も無いところにある公立高校だ。

生徒は、基本的に町内か、隣の町に住んでいるものばかり。

なんで、少子高齢化の波で生徒数も減少中。一学年二クラスしかない。

だからまあ、会長が俺の名前を覚えているのも普通といえば普通だ。俺だって、流石に学年分くらいは名前を覚えている。

「何よ？ 時じゃなくて、一時って呼んで欲しいとでも言うの？」

「いや、それは特にこだわり無いです……」

そう、じとき時一時、それが俺の本名だ。どうして時という漢字を二度も使いたったのかは知らないが、まあ、嫌いではない。苗字も、名前も。

だから、どちらで呼ばれても構わないのだが……会長に下の名前で呼ばれるのは、何だか照れる気もする。

「そう、なら、時でいいわね。そ、それで、時！」

「は、はい？」

というか、俺なんで同級生に敬語使ってるんだろ……

無意識のうちに、口から出ていた。なぜかわからないけれど、敬語で喋らないといけない気分になっている。年齢も同じなんだし、タメ口でいいはずなのに。

「あ、あんた……き、今日見たことは、他言無用よ」

「……いや、最初からそのつもりで……」

「う、うるさいっ！　そ、それで……見ちゃったんだから……協力しなさいっ！」

………反応できなかった。

だって、意味がわからなすぎるから、どという展開だよ、これ。

協力って、何のことだよ。というか、会長って結構キツイ性格だったんだな。才色兼備……ではなかったのか。いや、まあ、そんなに完璧な人間いても気持ち悪いけど。

「は、話を聞きなさいよっ！」

「え、あ、はい……って、いや、何なんですか！？　協力って！？」

「きよ、協力は、協力よ」

いや、だから協力って……、と聞こうとしたときに、携帯を買ったときから何も変わっていない、聞きなれた音声が響く。俺の、携帯だ。

どうしようかと思って、会長を見ると、「さ、さっさと取りなさいよ」と言われた。なので、ポケットから二年ほど使用している薄い青色の携帯を取り出して、通話ボタンを押した。

相手は、レンタルショップに先ほど向かった母親で、レンタルをしたから、帰るというものだった。つまり、俺も会長の前から去ら

なければならぬ時間ってことだ。

「会長、俺、そろそろ帰らないといけないんですけど……」

「え、あ……そう……そうね。と、時！」

「はい？」

「携帯っ、貸しなさい！ それと、これ、持っておいて！」

会長はそう言いながら、俺にゲームを差し出した。俺は、とりあえずそれを受け取る。

すると、会長は次に手のひらを差し出してきて、多分、携帯をここに乗せると、言うことなのだろう。何をするのかよくわからなかったが、俺は会長の手に乗せた。

すると、会長は自分の携帯らしきものを、肩にかけていた白いバッグから取り出す。会長の携帯は、鞆同様真っ白だった。

そして、勝手に俺の携帯を開き弄る。

何してんだ、会長……と思ってしまったが、見られて困るものも特に無いのでそのまま見ていた。そして、会長は……ああ、そうか。赤外線通信だ。

会長が自分の携帯と俺の携帯を合わせているのを見て、何をしているのかやっとな把握する。そして、通信はすぐに終了したようで、会長は俺の携帯を再度少し弄った。そして、ズイツと俺の目の前に画面を見せ付ける。

「岡本花火で登録してあるから……メールの返信はすぐにしてよ！」

「え、あ、はあ……」

「それじゃあ、私も帰る！」

会長はそう言い残して、俺の手からゲームを奪い、変わりに携帯を差し出してから、レジのほうへ向かっていった。

レジは、出口と逆の方向にあるので、俺はとりあえず会長とはそこでわかれ、店を出るのだった。

3回目 メール

会長がゲームシヨップでいる姿を目撃してしまった翌日のことだ。目が覚めた後、俺が最初に考えたのは、あれは夢だったんじゃないかということだ。

冷静になって考えてみると、どう考えてもおかしいのだ。あの忙しそうな会長が、ゲーム、それも乙女ゲームにのめり込んでいるなんて、どうかしている。

だから、あれは全部夢の話。そう、それでいいんだろうと考えた。

なのに、それが夢ではないと裏付けるものがある、

それは、昨日会長に半ば無理やり交換させられたアドレスだ。

携帯を開いてみれば、メールが一通来ており、差出人は、岡本花火。どう見たって、それは会長の、名前だ。

「ああ、そうか……」

そのメールを見た後で、すぐに昨日の夜のことを思い出した。そうだ、俺は昨晚、会長とメールで話をしていたのだと。

夜、夕食を終えて、八時ごろから自室で何をするでもなくぼんやりと過ごしていたら、携帯がメールが来たことを告げた。

俺にこんな時間にメールをしてくるなんて誰だろうと思いつながら

携帯を見てみれば、メールの差出人は、岡本花火。

どうしようかと思いつつ、メールを開けてみれば……………正直、後悔した。

だって、おかしいだろう。

絵文字、いや、改行の一つもなく、ダラダラと書かれたメールなんて。

読む気が一瞬でうせてしまった。

せめて、改行くらいしてくれ…………そう、心の底から思ってしまった。

しかし、俺はそれを必死で読んだのだ。内容は以下のようなものだった。

『時、私の秘密を知ったわね。とりあえず言うておくけど他言無用だから。人に言ったりしたら、時のこと絶対に許さないから。この他人っていうのは、姉のこともだからね。あの人に言ったりしたら、絶対に許さないから』

姉、というのは、色々とわけありな会長の義姉のことだろう。わけあり、というのは現在会長は高校三年生で、姉が高校にいたらおかしいのだが…………いるのだ。会長より二つ年上なのに同級生の姉が、いっても、この姉は留年しているわけではなくて、入学が遅かったのだ。その理由は、流石に俺も知らないけれど。

そして、この姉というのが凄いのだ。

俺の通う学校（嶺高校^{みねこうこう}）はクラス数が少ない。が、一応その少ない二クラスでもクラスわけをされている。

二年次からのクラスわけで、片方は商業、もう一つは進学だ。

そして、俺は商業コース、会長は進学コース、そして、会長の姉

は商業コース。つまり、俺と同じなのだ。

だから、俺はほぼ毎日会長の姉と顔を合わせているのだが、なんというか……会長に負けず劣らずの美女ではあるのだが……変だ。

何が変わかと聞かれると、もう、全部としか言いようが無い。

なんで、まあ、会長も姉とはそれほど仲がよくないのだろう。

それに関して、俺は触れることは止めておいた。デリケートな問題でもあるかもしれないからだ。

大体、俺は姉とは話さないしな。

ええと、それで続きた。

『それで、言って置くけど学校でゲームの話を持ちかけたら許さないからね。あでも、何か面白い乙女ゲームがあつたらすぐにメールしなさい』

「いやいやいや……乙女ゲームはししないでしょ。ギャルゲーはするかもしれないけども……」

流石に、男の俺が乙女ゲームをするのは……あまり、想像したくない光景だ。ギャルゲーもしたことはないけれど、まだ、俺がやっていてもおかしくないジャンルだろう。

『あでもね、普通に話しかけるのは止めないから。あくまで、友達としてはね。私は忙しいから話を聞いている暇も無いかもしれないけれど。そうそう、私が忙しいのは知っているでしょう？ だから少し、手伝って欲しいのよ。これが、今日店で言った協力ね。私、忙しくてなかなか買い物に行けないのよ。だから、私が頼んだらゲーム買いに言ってくれない？』

ここで「え」と一人で声を出してしまった。

その、声をかけて言いというのは、少し嬉しかった。が、それとこれとは話は別だ。

だって、その後に書かれている乙女ゲームを買ってきてくれというのは、流石に……。俺は、姉も妹も……というより、兄弟がいないのでそんなものを一人で買っているのを知り合いに見られたら、いや、普通に店で他の人に見られても、おかしいと思われてしまいそうなものである。

それだったら、まだ会長が自分で買うほうが普通だろうと思った。なので、これに関して一度メールを送ってみると、すぐに返事は届いた。

『馬鹿ね。買いに行けとは言っていないでしょう。時は、ネットショッピングとか使っていないの？ 私は、それをしたら姉にばれるから出来ないのよ。だから、時がしてくれたら助かるといっているの。そんなこともわからないの？』

「そんなこともわからないのって……どんだけ、上から目線なんだよ……」

人を引っ張る力、リーダーシップを持っているとは思っていたが、ここまで上から目線で命令されるとは思わなかった。いや、向こうはこれを無意識にしているのかもしれないけれど。

しかし、ネットか……。

それなら、確かに俺なら出来る。というかまあ、ネットで買っと安いしな。

なので、『ああ、ネットね。それなら、出来るよ』と返事をした。すると、即効で、本当に、一分も経っていなかった。そんな速さで、返信が来る。

『ありがとう！』

……正直、少しドキツとした。

だって、さつきまで『！』なんて一度たりとも使わなかった。それに、異様なくらい上から目線だった。

なのに、簡単にありがとうと送ってくるなんて思いもしなかった。

上手い、飴と鞭の使い方だ。

断れない、状況を簡単に作り上げている。

それで、なんだかやけに照れてしまって、俺はここでメールの返事を止めた。まあ、照れただけじゃなくて、送ることがなかったのも理由だ。

そうして、風呂に入ったり、歯を磨いたりしてから、俺はベッドに入るのだった。

明日から、会長と俺の関係は何か変わったりするのかな？ そんなことを、思っ

て、翌日だ。

俺は平日はいつも六時くらいに起きているので、今日もそれを守った。

携帯には、会長からのメール。
内容は……

「何様……」

つい、本音が漏れてしまった。
だって、本文……

『学校に七時に来なさい』

来なさい、って……。どんだけだよ。

しかし、断るのもあれかな？ と考えてしまい、とりあえずさっさと準備することに決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9944z/>

乙女ゲーマーな彼女

2012年1月5日20時54分発行